半刈りで多様性保つ

9月 伝統地で干し草刈り

開田の草地

9月初中旬、木曽町開田高原の伝統的草地は干し草刈りの時期。「草が成長しきって収量も多い。若いとかびやすく、遅く葉が黄色い頃は栄養がない」という経験則からだ。

開田の草刈り唄は「草を刈るならききょうばな残せ」とうたう。ちょうどキキョウの花は終わりかけ実をつけている。マツムシソウは花盛り、足元ではウメバチソウが咲き始めた。リンドウの花はまだ先だ。

伝統的な管理は2年ごとに草を刈る。「ススキの丈が穂一つ低い所が境」と地権者は指さす。低い草地は昨年の採草地。今年は土地を休ませ草を刈らずに来春枯れ草に火を入れる。一段背が高い草地は今秋の草刈り場。この春火を入れ草の伸びがいい。

神戸大学生物多様性研究室の永田優子さん(25)は「残された草地で秋咲きの種類も種ができ次世代が続く。また、秋の草刈りや春の火入れによって草が取り除かれ日当りが確保される。春先に咲くミツバツチグリなど低い草丈の種類の生育条件のひとつになる」と半刈り・半火入れの管理が植物の種類を広げる要因と考える。昆虫も最盛期は過ぎたが、まだ活動時期だ。「残された草地を多種の虫が利用する」と同研究室の内田圭さん(33)はみる。

「伝統的な干し草は毒草や薬草も含む。馬は毒草をよけ、薬草など多種の草を食べるため、単一の牧草より馬の体には良い」と木曽馬の保護・育成施設「木曽馬の里」の中川剛さん(35)は言う。

同施設の飼料は栽培牧草が主だ。約30頭を飼育し、放牧時以外は年間60－80トンの輸入干し草で賄う。ススキなど堅い繊維質の草を食べてきた木曽馬は、洋馬種よりも盲腸が30センチ長い。大きな「草腹」は木曽馬の特徴だが、柔らかく栄養価の高い栽培牧草で育つ馬は体形も少し変わったという。

今年、同施設は大型機械を使い5トンの干し草作りを試みた。雨の多い開田では干し草作りは難しく、なにより労力が大きい。遊休地の草の提供の申し出もあるが「現状では利用は困難」と中川さんは話す。

（田澤佳子）

マツムシソウが咲く伝統地。右半分は草を刈り、左半分は残された